

---

土地分類基本調査

---

彦根西部

5万分の1

国土調査

滋賀県

1981

## 序 文

本県は、その中央部に我が国最大の湖である琵琶湖をかかえ、これを取り囲むように近江平野と緑の山並が展開する恵まれた自然環境のもとにあります。また、古くから交通の要衝であったことから、経済、文化の重要な位置を占めてきました。しかしながら、我が国経済の高度成長のなかで、本県もその例にもれず、都市化の進展等によって一部で土地利用の混乱や自然環境の悪化という事態を招きました。

こうしたなかで、昭和55年7月に琵琶湖富栄養化防止条例が施行され、続いて昭和56年3月には滋賀県環境影響評価に関する要綱が定められる等、本県は琵琶湖を含む県土の保全に最善の努力をしているところであります。こうした環境保全を総合的に推進していくためにも、県土の自然的な実態を科学的には握しておくことが必要です。

土地分類基本調査は、土地の自然的条件のうち特に土地の基本的性格を形成している地形、表層地質および土壌について調査を行うもので、適正な県土の開発、保全計画等、各種の土地利用計画を作成するための基礎資料を提供するものです。本県では、昭和55年度から向う10カ年に渡って同調査を実施することとなり、初年度は「彦根西部」について調査を行い、本年度その成果を印刷いたしました。

今後この成果が、行政の資料としてはもちろん、関係者の1人でも多くの皆様に御活用いただけることを期待しております。

なお、本調査の実施に当たって御協力いただきました関係各位に対し、深く謝意を表する次第であります。

昭和57年3月

滋賀県企画部長 吉原孝司

# ま え が き

1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4項の規定による国土調査の指定を受け、滋賀県が、都道府県土地分類基本調査作業規程に基づいて実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査機関および調査担当者は次のとおりである。

指 導 国土庁土地局国土調査課 専 門 調 査 官 萩倉 克幹

総 括 滋賀県企画部土地対策課 課 長 桂田 繁

地形分類調査（水系・谷密度、起伏量、標高区分の各調査を含む）

滋賀大学教育学部 教 授 小林健太郎

表 層 地 質 調 査 滋賀大学教育学部 教 授 立川 正久  
滋賀地学研究会

土 壌 調 査 滋賀県農業試験場 土 壌 調 査 係 長 沢 重孝  
技 師 永井 嘉和  
滋賀県森林センター 林業専門技術員 古川 政伯

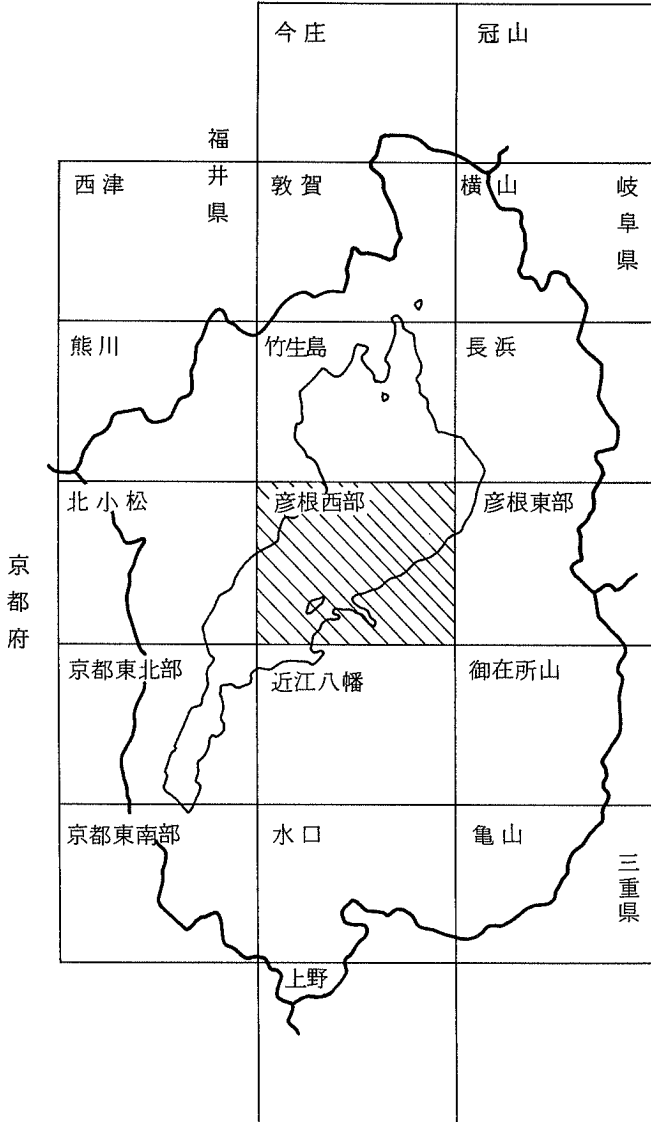
土 地 利 用 現 況 調 査 滋賀県農業試験場 土 壌 調 査 係 長 沢 重孝  
技 師 永井 嘉和  
滋賀県森林センター 林業専門技術員 古川 政伯

# 目 次

## 序 文

I 地 域 の 概 要	1
1 位置および行政区画	3
2 地域の概要	4
II 地 形 分 類	17
III 表 層 地 質	27
IV 土 壤	35
1 林地土壌	37
2 農地土壌	43
V 土 地 利 用 現 況	55

# 位置図



# I 地 域 の 概 要

# I 地域の概要

## 1 位置および行政区画

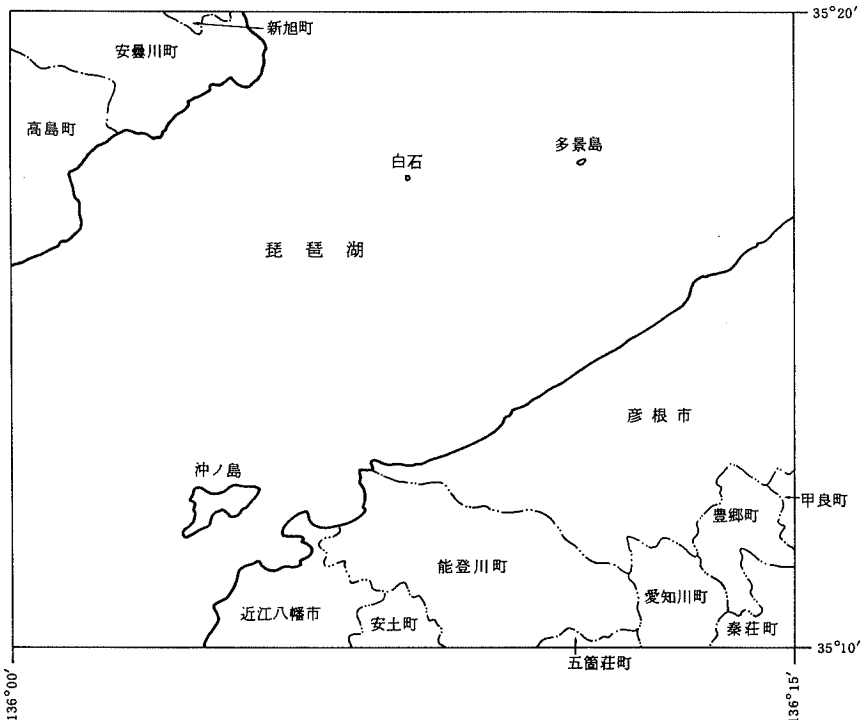
### 1-1) 位置

「彦根西部」図幅は、滋賀県の中央に位置し、経緯度では、東経 $136^{\circ}00'$ ～ $136^{\circ}15'$ 、北緯 $35^{\circ}10'$ ～ $35^{\circ}20'$ の範囲内である。なお、本図幅面積は約 $420\text{km}^2$ であり、うち琵琶湖を除いた陸地部分は約 $147\text{km}^2$ である。

### 1-2) 行政区画

本図幅内に含まれる市町村は、第1図のとおり、湖東地域の彦根市（多景島を含む）、甲良町、豊郷町、秦荘町、愛知川町、五箇荘町、能登川町、安土町および近江八幡市（沖ノ島を含む）の各一部ならびに琵琶湖をはさんだ対岸湖西地域の高島町、安曇川町および新旭町の各一部である。

第1図 位置および行政区画



第 1 表 市町村別面積

区分 市町村名	図幅内面積		市町村全 面積 (B)	(A) / (B)
	実数 (A)	構成		
近江八幡市	1 2.5 6 Km <sup>2</sup>	3.0 %	7 6.5 3 Km <sup>2</sup>	1 6.4 %
安土町	3.2 0	0.8	2 4.5 4	1 3.0
五個荘年	0.9 7	0.2	1 6.3 6	5.9
能登川町	2 6.9 9	6.4	3 1.2 5	8 6.4
彦根市	5 3.4 3	1 2.7	9 9.3 4	5 3.8
秦荘町	3.8 5	0.9	2 5.0 3	1 5.4
愛知川町	7.2 7	1.7	1 2.9 9	5 6.0
豊郷町	7.4 7	1.8	7.9 7	9 3.7
甲良町	1.0 5	0.3	1 4.7 3	7.1
安曇川町	1 6.9 7	4.0	4 8.3 2	3 5.1
高島町	1 2.2 7	2.9	6 3.2 2	1 9.4
新旭町	0.5 9	0.2	3 2.3 6	1.8
小計	1 4 6.6 2	3 4.9	4 5 2.6 4	3 2.4
琵琶湖	2 7 3.7 8	6 5.1	—	—
合計	4 2 0.4 0	1 0 0.0	—	—

資料：建設省国土地理院「昭和 5 5 年全国都道府県市区町村別面積調」（昭和 5 5 年 1 0 月 1 日現在）

(注) 図幅内面積は、プランメーターにより 5 万分の 1 地形図を計測したものである。

## 2 地域の概要

### 2-1(1) 地 勢

本図幅内の地域は、県土のほぼ中央に位置し、琵琶湖をはさんで南東部に湖東平野が、北西部に湖西平野が開けている。これらの平野は、愛知川、宇曾川、犬上川や安曇川、鴨川等県下でも有数の河川によって形成された低地や大中の湖等の干拓地からなり、豊かな田園の広がる穀倉地帯を形づくっている。

また、この地域には目立った山地はなく、標高 2 0 0 ~ 4 6 0 m 程度の荒神山、



奥島山、沖ノ島および比良山地の北東端等が存する程度である。

なお、当地域には、数少ない琵琶湖上の島のうち最大の沖ノ島と多景島の2島が含まれており、また、名勝“沖の白石”もこの地域内に位置している。

## 2-② 気 象

本県は、伊勢湾と若狭湾とにはさまれて本州で一番狭くなった所に位置し、中央には琵琶湖を抱え、四囲は山々で囲まれるという複雑な地形的要素から、県内各地でその気候にかなりの相違がみられる。特に冬期において県北部は日本海型気候となり、太平洋型気候の県南部との差が著しい。

本図幅内の湖東地域はほぼ太平洋型気候と日本海型気候の接するところとなり、湖西地域は日本海型気候となっている。

気温については、湖東地域の彦根気象台および湖西地域の北小松観測所（隣接図幅「北小松」内）とも、平均気温が14～15℃となっている。また、湖周辺では琵琶湖の影響で日較差（1日の最高と最低の差）が比較的小さく、湖陸風が現われる特徴がある。

降水量については、山地の迫っている湖西地域の方が、平野からなる湖東地域より多くなっている。

なお、彦根気象台と北小松観測所の気象概況は第2表のとおりである。

第2表の1 彦根地方気象台気象概況

(位置：北緯35°16.4' 東経136°14.6')

区分	月別												平均 (合計)	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
平均気温 (℃)	54年	4.5	6.0	6.6	11.5	16.1	23.2	24.8	27.1	22.9	17.6	12.2	7.5	15.0
	55年	3.4	2.8	6.3	11.3	16.9	22.0	23.7	24.7	21.7	16.6	11.2	4.7	13.8
	1941~ 1970年	3.2	3.6	6.5	11.9	17.0	21.3	25.8	27.1	23.0	16.7	11.1	6.0	14.4
平均最高 気温 (℃)	54年	8.1	9.1	10.2	15.5	21.2	26.9	28.6	31.6	26.5	21.9	15.8	11.2	18.9
	55年	6.2	5.8	10.0	15.5	21.9	25.6	26.9	27.9	25.2	19.9	15.0	8.1	17.3
	1941~ 1970年	6.5	7.0	10.6	16.6	21.8	25.3	29.7	31.7	27.1	21.0	15.4	9.6	18.5
平均最低 気温 (℃)	54年	1.2	2.8	3.0	7.9	11.3	19.8	21.5	23.4	19.4	13.4	8.9	3.9	11.4
	55年	0.3	0.2	2.4	7.0	12.2	18.6	21.0	22.4	18.6	13.4	7.8	1.5	10.5
	1941~ 1970年	-0.1	0.1	2.4	7.1	12.2	17.3	21.8	22.5	18.9	12.3	6.8	2.3	10.3
降水量 (mm)	54年	85	137	115	168	145	249	92	62	117	72	123	46	141.1
	55年	177	68	151	189	256	171	278	285	176	127	126	129	213.3
	1941~ 1970年	112	100	120	133	146	226	218	134	201	128	84	94	1,696
積雪日数 (日)	54年	3	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
	55年	15	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	34
	1965~ 1980年	17	16	7	—	—	—	—	—	—	—	—	5	45

第2表の2 北小松観測所気象概況

(位置：北緯35°14.8' 東経135°58.4')

区分	月別												平均 (合計)	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
平均気温 (℃)	54年	4.6	6.2	6.6	11.4	15.9	22.3	24.2	26.2	22.8	17.3)	12.4	7.6	14.8
	55年	3.5	2.8	6.3	11.3	16.8)	21.6	23.3	24.3	21.2	16.5	11.3	4.9)	13.7
平均最高 気温 (℃)	1941~ 1970年	3.6	3.7	6.6	12.0	17.0	21.0	25.2	26.7	23.1	17.2	11.8	6.5	14.6
	54年	8.5	9.4	10.3	15.7	20.7	25.9	27.9	30.2	26.2	21.8	15.8	11.1	18.6
平均最低 気温 (℃)	55年	6.7	6.1	10.1	15.3	21.3	25.0	26.3	27.4	24.7	19.9	15.0	8.3	17.2
	1941~ 1970年	7.0	7.3	10.7	16.6	21.4	24.8	28.6	30.5	26.6	21.0	15.6	10.0	18.4
平均最低 気温 (℃)	54年	1.2	2.8	3.0)	7.7	11.0	19.1	20.9	22.8	19.6	13.9	9.1	4.2	11.3
	55年	0.5	-0.2	2.6	7.1	12.2)	18.3	20.7	21.9	18.1	13.3	7.8	1.9	10.4
降水量 (mm)	1941~ 1970年	0.1	0.1	2.5	7.4	12.5	17.2	21.7	22.9	19.5	13.4	7.9	2.9	10.7
	54年	113	167	120	198	235	303	63	120	205	112	155	72	1,863
積雪日数 (日)	55年	160	69	196	186	306	168	383	191	183	152	136	125	2,255
	1941~ 1970年	140	120	144	172	181	277	252	157	228	141	105	112	2,029
積雪日数 (日)	54年	5	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
	55年	8	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15
積雪日数 (日)	1965~ 1980年	18	16	7	—	—	—	—	—	—	—	—	4	46

資料：彦根地方気象台「滋賀県気象年報」、滋賀県防災会議「滋賀県地域防災計画」  
(注) は値に欠測(20%以下)を含んでいることを示す。

2-(3) 人 口

本図幅内の人口は、「滋賀県地域メッシュ統計報告書（昭和50年国勢調査編）」によれば、昭和50年10月1日現在、90,341人で県全体人口の約9%を占めている。この中では、彦根市の44,413人をはじめとして、能登川町の16,159人、安曇川町の9,057人とこの3市町で当該地域人口の77%を占めている。

国勢調査結果に基づいて、昭和50年と55年の関係市町村別人口を比べてみると、ほとんどの市町村で増加を示しているが、特に国鉄東海道線沿いに南下する能登川町、安土町および近江八幡市で人口増加率が高くなっている。このことは、京阪神への近接性という交通条件等の地の利を反映して宅地開発の波を強く受けているためと考えられる。

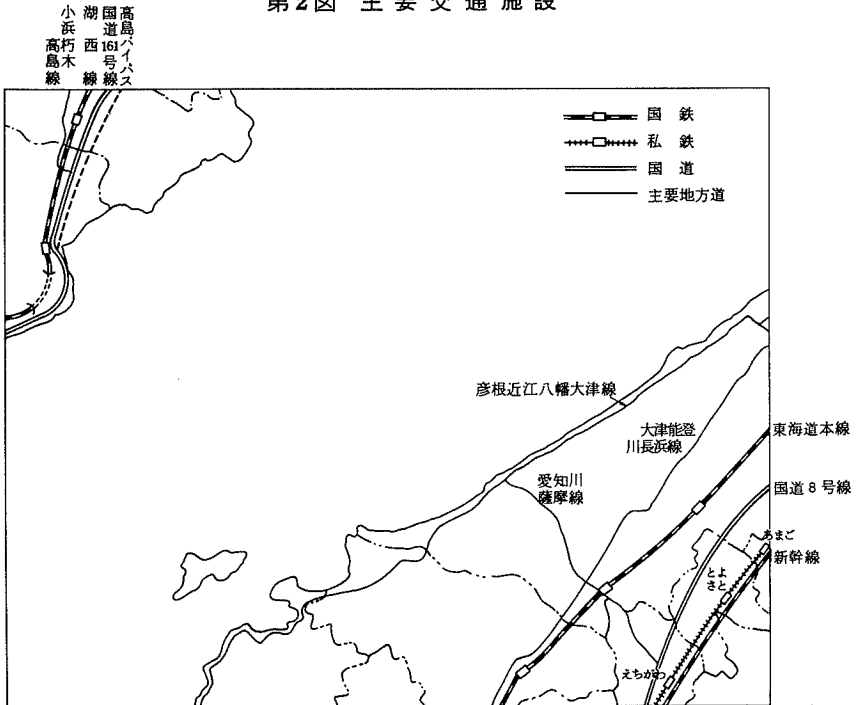
第3表 市町村別人口

区分 市町村名	昭和50年図幅内市町村別		昭和50年 市町村別 人口 (A)	昭和55年 市町村別 人口 (B)	増減率 (B) / (A)
	世帯数	人口			
近江八幡市	294	1,293人	51,537人	60,507人	17.4%
安土町	43	228	8,550	10,256	20.0
五個荘町	114	497	9,002	9,378	4.2
能登川町	3,858	16,159	16,815	19,750	17.5
彦根市	11,608	44,413	85,066	89,698	5.5
秦荘町	415	1,827	8,073	7,960	△1.4
愛知川町	1,486	5,797	8,943	9,072	1.4
豊郷町	1,654	6,577	6,992	7,194	2.9
甲良町	33	136	9,024	9,058	0.4
安曇川町	2,182	9,057	12,283	12,746	3.8
高島町	999	3,999	6,342	6,523	2.9
新旭町	79	358	9,480	9,784	3.2
計	22,765	90,341	232,107	251,926	8.5
滋賀県	—	—	985,621	1,079,885	9.6



たしている。なお、国道161号線の交通停滞の解消を図るため、高島バイパスの建設が進められている。

第2図 主要交通施設



### 2-5) 産 業

本県の産業別就業人口の構成比を、昭和50年の国勢調査結果からみると、第1次産業18.0%、第2次産業38.7%、第3次産業43.3%であり、これに対して本図幅の関係市町村のそれは、各々21.3%、38.3%、40.4%とほぼ全県的な傾向を示している。

第 5 表 産業別就業人口

(単位：人、%)

産業別 就業人口 市町村名	昭 和 50 年						昭和 45 年 構成比			
	第 1 次産業		第 2 次産業		第 3 次産業		計	第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業
	構成比	構成比	構成比	構成比						
近江八幡市	5,371	21.5	8,654	34.8	10,873	43.7	24,898	33.2	29.0	37.8
安土町	1,322	30.3	1,441	33.0	1,600	36.7	4,363	40.6	28.3	31.1
五個荘町	927	19.6	2,016	42.7	1,778	37.7	4,721	26.8	41.8	31.4
能登川町	2,051	24.1	3,250	38.2	3,205	37.7	8,506	33.9	34.4	31.7
彦根市	5,891	14.1	17,114	41.0	18,715	44.9	41,720	21.6	38.1	40.3
秦荘町	1,656	36.5	1,519	33.4	1,367	30.1	4,542	47.4	26.5	26.1
愛知川町	886	20.4	1,696	39.0	1,769	40.6	4,351	30.4	34.1	35.5
豊郷町	838	25.7	1,171	35.9	1,255	38.4	3,264	36.6	28.9	34.5
甲良町	1,236	28.5	1,834	42.2	1,274	29.3	4,344	37.7	38.2	24.1
安曇川町	2,182	33.8	2,080	32.2	2,191	34.0	6,453	45.7	29.0	25.3
高島町	1,288	38.1	856	25.3	1,240	36.6	3,384	48.8	21.5	29.7
新旭町	1,041	19.7	2,669	50.6	1,569	29.7	5,279	27.6	52.8	19.6
計	24,689	21.3	44,300	38.3	46,836	40.4	115,825	30.9	34.5	34.6
滋賀県	87,787	18.0	189,144	38.7	211,689	43.3	488,620	27.6	35.1	37.3

資料：昭和 45 年、50 年国勢調査

(注) 「分類不能」は、第 3 次産業に含めた。

## ① 農林水産業

本図幅内の地域は、大中の湖等の干拓地をはじめ、ほ場整備事業等の土地改良事業が広範囲に実施されており、稲作に適した農地が広がっている地域といえる。このため、この地域では、「近江米」で知られる稲作が農業の大部分を占めるが、大中の湖干拓地を中心に、キャベツ、すいか、かぶ、トマト、はくさい等の野菜栽培や肉用牛の肥育等も行われている。

林業については、この地域では林野が少なく特に目立ったものはない。

水産業については、本図幅内に琵琶湖の代表的な漁港である沖の島漁港をはじめ

め数ヶ所の漁港があり、琵琶湖漁業では、あゆ、もろこ、いさざ、えび、ふな等の漁獲がみられる。

第6表 農 林 水 産 業

区 分 市町村名	農 業							林 野 面 積 (ha)	漁獲量 〔琵琶湖〕 (t)
	農 家 数 (戸)	経営耕地 面積(ha)	農業粗生産額 (百万円)				その他		
			米	野菜	畜産	その他			
近江八幡市	3,768	3,403	6,663	4,741	568	1,119	235	1,499	1,092.4
安 土 町	1,038	1,210	3,198	1,560	267	1,300	71	480	5.0
五 個 荘 町	826	526	1,129	736	67	290	36	510	—
能 登 川 町	1,521	1,616	3,099	2,362	378	267	92	261	98.8
彦 根 市	5,305	3,378	6,053	4,898	801	177	177	2,629	625.8
秦 荘 町	1,249	964	1,503	1,178	134	107	84	940	—
愛知川町	899	615	1,077	835	78	132	32	27	—
豊 郷 町	794	442	786	637	73	38	38	10	—
甲 良 町	1,045	684	1,178	920	111	90	57	192	—
安曇川町	1,564	1,496	2,546	1,752	236	475	83	1,416	281.5
高 島 町	823	874	1,374	1,194	98	65	17	4,592	18.7
新 旭 町	1,017	916	1,455	1,212	164	53	26	529	28.4
計	19,849	16,124	30,061	22,025	2,975	4,113	948	13,085	2,150.6
滋 賀 県	76,942	57,260	103,297	71,748	11,045	13,152	7,352	206,348	5,288.5

資料：農家数、経営耕地面積 — 滋賀県企画部「1980年世界農林業センサス結果報告書」(昭和55年2月1日現在)

農業粗生産額 — 近畿農政局滋賀統計情報事務所「昭和54年生産農業所得統計」

林野面積 — 滋賀県農林部「昭和54年度林業統計要覧」

漁 獲 量 — 近畿農政局滋賀統計情報事務所「昭和54年漁業生産量調査」

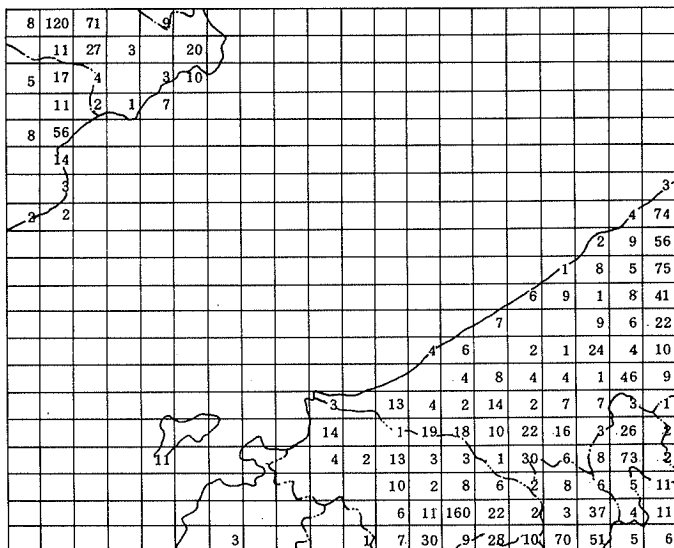




### ③ 商 業

本図幅内の商店数は、昭和54年6月現在1,764で、全県2,1474のうち約8%を占めている。このうち湖東地域は、ほぼ彦根市を中心とした商圏に含まれているが、その他国鉄能登川駅周辺や愛知川町にも商店街が形成されている。

第8表 地域メッシュ別商店数



#### ④ 観 光

本図幅内では、湖東地域、湖西地域ともに琵琶湖に面しており、近江八幡国民休暇村や萩の浜をはじめ、風光明媚な水泳場が多い。また、琵琶湖遊覧船の基地である彦根港も一部含まれている。なお、昭和54年に本図幅内の観光地を訪れた観光者数は797,100人で、本県観光者総数25,583,000人のうち約3%となっている。

第9表 本図幅内の主な観光地と観光者数 (単位：人)

観光地名	市町村名	観 光 者 数			主な観光目的
		日 帰 り	宿 泊	計	
近江八幡国民休暇村	近江八幡市	297,100	36,300	333,400	水泳、船遊び
奥島山自然休養林	〃	13,000	1,800	14,800	登山、ハイキング
沖ノ島	〃	1,100	800	1,900	水泳、船遊び
彦根浜	彦根市	80,600	—	80,600	遊覧船
新海浜	〃	201,500	—	201,500	水泳、船遊び
近江白浜水泳場	安曇川町	32,700	5,400	38,100	〃
青少年レクリエーションセンター	〃	9,700	7,100	16,800	キャンプ
藤樹神社	〃	2,500	200	2,700	社寺、文化財
白鬚浜・白鬚神社	高島町	29,700	6,100	35,800	水泳、船遊び、社寺、文化財
萩の浜	〃	46,300	25,200	71,500	水泳、船遊び
計	—	714,200	82,900	797,100	—
滋賀県	—	23,432,900	2,150,100	25,583,000	—

資料：滋賀県観光物産課「昭和54年滋賀県観光地観光者数統計調査書」

## Ⅱ 地 形 分 類

## Ⅱ 地形分類

### 1 地形の概要

「彦根西部」図幅地域は近江盆地の中央部に位置し、図幅の北東部から南西部にかけては琵琶湖中央部の広大な水域がひろがっている。その南東部には湖東平野を構成する沖積低地や干拓地が展開し、荒神山、和田山、織きぬがさ（観音寺）山の北端、奥島山、沖ノ島など湖東島状山地と総称される孤立丘としての小山地が散在している。一方、図幅の北西部には湖西平野の南端部にあたる沖積低地がみられ、比良山地の北東端がわずかに顔を出している。

琵琶湖は南北 68 km、東西の最大幅 22.6 km、湖岸線の延長 235 km、湖面標高 84.4 m のわが国最大の湖で、その面積 675 km<sup>2</sup> は滋賀県総面積の約 6 分の 1 に相当する。本図幅に含まれる部分はその中央部にあたり、図幅の北端付近が東西方向の最大幅員を示すとともに、西岸から約 3 km 沖合には水深 103.4 m の最深地点（KM 点）が位置している。

### 2 地形区の区分

本図幅の地形分類は、地形図および国土基本図の読図、空中写真の判読、および現地調査の成果を総合的に比較検討することによって行い、海拔高度、起伏量、谷密度、傾斜分布、地形面の形状と性質、構成物質、地域的なまとまりなどを基準にして、下表のように地形区を区分した。

I 山地	a 比良山地	1 見張山地
	b 湖東島状山地	1 荒神山 2 和田山 3 織 <small>きぬがさ</small> （観音寺）山 4 奥島山 5 沖ノ島 6 多景島
II 丘陵地	a 湖西丘陵	1 泰山寺野 2 高島丘陵

Ⅲ 低 地	a 湖 東 平 野	1 犬上川扇状地 2 愛知川扇状地 3 芹川三角州 4 犬上川三角州 5 愛知川三角州 6 干 拓 地
	b 湖 西 平 野	1 安曇川扇状地 2 鴨川扇状地 3 安曇川三角州 4 鴨川三角州 5 比良山麓複合扇状地

### 3 地形区各論

#### I 山 地

##### 比良山地 ( I a )

西隣の「北小松」図幅に主部を有する比良山地は、東西幅3~10 km、南北約15 kmの北部に広く南部に狭い地壘山地で、東西両側を断層性の急崖で限られており、それぞれ北部と南部の最高点を示す武奈ヶ岳(1,214 m)と蓬萊山(1,174 m)の周辺には、標高1,000 m前後に前輪回の準平原遺物に相当する山頂小起伏面を有している。本図幅に含まれるのは比良山地北東端の見張山(5,173 m)から東方にのびる稜線で、山地の輪郭は比高200~300 m(起伏量4~5)の急峻な山腹斜面によって囲まれている。この山腹斜面中最大の傾斜を示すのは琵琶湖に面する白鬚神社背後の斜面で(傾斜37度)、鴨川低地に臨む北側にも30度似上の急斜面が部分的に散在している。これに対し、稜線部にあたる標高約300 m以上の部分には傾斜15~20度の山頂小起伏面が残されており、本図幅中での最高点は標高460 mを測る。

##### 湖東島状山地 ( I b )

湖東平野の中央部に散在する島状の小山地を総称して湖東島状山地と呼び、本図幅中には荒神山(280 m)、和田山(180 m)、織山(観音寺山、433 m)の北端、奥島山(424.7 m)の主部、沖ノ島(220.2 m)、多景島(101.3 m)が含まれて

いる。これらの島状山地は「湖東流紋岩」と呼ばれる硬い岩石から構成され、かつてこの地域が侵食されていた時代に、その侵食から取り残された残丘である。いずれも30度前後の急斜面が山麓から山頂や稜線まで続いており、山頂部にも緩斜面はほとんどみられない。山腹斜面を刻む谷は多いが、いずれも小規模短小なものばかりで、深く刻み込まれた谷筋は欠除している。

本図幅中の湖東島状山地の中で最大の規模を有するものは奥島山で、中心的な稜線は逆U字形を示し、山麓線の凹部には小さな崖錐を付着させ、極めて小さな谷底平野も二カ所にみられる。北および西に面する山脚は直接琵琶湖に没して湖岸に磯を形成しており、東端から北方へ伸びる支脈は、かつて大中の湖唯一の排水口であった切通しの鞍部をはさんで伊崎不動まで突出している。奥島山の北岸から2 km 足らずの沖合に浮ぶ沖ノ島は琵琶湖最大の島(面積 1.5 km<sup>2</sup>)で、東北東～西南西方向の長軸 2.6 km に対し、これに直交する短軸の長大幅は 0.8 km にすぎない。島全体が地形的には山地の状態を呈し、標高 220 m を最高点とする胴体部とその西南西に付着する頭山(かしらやま 142 m) との間の鞍部に島内唯一の集落が立地している。沖ノ島の北東方 1.3 km 余、犬上川河口から北西へ 5 km の湖上に浮ぶ多景島は標高 101.3 m、琵琶湖水面からの最大比高でも 17 m 足らずにすぎない小島(周囲約 0.5 km) であるが、「湖東流紋岩」で構成された山地の頂上のみが水面上に顔を出しているもので、湖東島状山地の一つに含まれる。

彦根市南部に位置する荒神山は東西 2.3 km、南北 1.8 km を測り、北方に突出した三角形に近い平面形を有している。その北西辺、琵琶湖に面する山麓線は単調で凹凸に乏しいが、東面と南面には小さな稜線がいくつか突出してやや変化の多い山麓線を描き、南方 0.5 km には標高 140 m の小山地を分離している。この荒神山は、湖北平野北部の沖積低地に聳立するため山頂からの眺望に優れ、山頂には三宝荒神(荒神山神社)が祀られている。近年はテレビ中継所が設置され、山頂まで自動車道路が開かれている。

綴山(まじりかき)はその主部を南隣の「近江八幡」図幅に置き、本図幅中にはその北端をのぞかせているにすぎない。その先端付近は佐生山(さねやま 158 m) と呼ばれ、東方 1 km には和田山を分離している。和田山は東西 0.8 km、南北 0.7 km の小山地であるが、西方への支稜は長勝寺山、北方への支稜は神郷山とも呼ばれている。東麓(えち)は愛知川左岸の自然堤防にくだんでいたが近年は削平されて原形を失っている。

## Ⅱ 丘陵地

### 湖西丘陵（Ⅱa）

古琵琶湖層群を構成層とする滋賀県下の丘陵地のうち、湖西丘陵の中心をなすのは北西隣の「熊川」図幅に主部を有する<sup>あいばの</sup>饗庭野と<sup>たつさんじの</sup>泰山寺野の両台地であり、標高200～250 mの台地面は砂礫段丘（上位）に分類されるが、台地面を取り巻く傾斜地は丘陵地に分類される。本図幅の北西隅にわずかに姿を見せている丘陵地は泰山寺野の南東辺を限る傾斜地の一部で、その比高は75 mに達する。

一方、比良山地の北麓に堆積した古琵琶湖層群で構成されている高島丘陵は西隣の「北小松」図幅に含まれる岳山（565 m）北麓を主部とするが、その東方への延長部が本図幅にまで侵入している。本図幅内でのこの丘陵はほぼ標高100～190 mの間にひろがり、傾斜20度未満のゆるやかな起伏を呈している。丘陵地の中央付近を比良山地北端に源を発する小田川がゆるやかな侵蝕谷を刻んで東北東に流れ、谷口には音羽の集落をのせる小規模な扇状地を形成している。

## Ⅲ 低地

### 湖東平野（Ⅲa）

湖東平野は、鈴鹿山脈から北西流して琵琶湖に注ぐ芹川・犬上川・宇曾川・愛知川・日野川等の諸河川によって形成された沖積低地で、谷口からは標高100 m付近までは扇状地が発達し、湖岸には三角州がひろがって、近江盆地最大の低地になっている。本図幅に含まれるのはその北部西半で、扇状地の末端部と三角州、それに湖岸に形成された砂礫堆（浜堤）と旧内湖に造成された干拓地とから構成されている。

本地域における扇状地と三角州との境界は必ずしも明瞭に区別されるものではなく、湧水帯の分布状態を基準とする場合は標高95～100 m付近に、水田土壌の直下にみられる地質の構成などを基準とする場合には90 m付近に設定されたりしている。かつて水山高幸・池田碩・大橋健（1975）は、沖積平野の微地形進化の系統性をもとに、この地域の沖積平野を、網状流路の存在によって示される狭義の扇状地帯、後背湿地と自然堤防が交錯する自然堤防帯、および湖岸の低平低湿な三角州帯の三地帯に区分し、その場合標高90～100 mの間がちょうど自然堤防帯にあたるとして、100 m等高線以上を扇状地帯とした。本図幅の地形分類も基本的にはこの考えに立脚しているが、ここにいう自然堤防帯と三角州帯を合せて三角州とし、明



瞭な微高地を形成する自然堤防のみを図示するにとどめた。

犬上川扇状地(Ⅲ a 1)は主部を東隣の「彦根東部」図幅に有する緩傾斜扇状地で、本図幅中には犬上川左岸の末端部のみが含まれているにすぎない。扇状地面は全体として南東から北西へ向って緩傾斜しているが、その平均勾配は5/1,000前後ときわめて平坦である。しかし地表の起伏を詳細に観察すると、かつて網目状に分流していた小河川によって形成されたものと推定されるわずかな起伏の痕跡が認められ、一面に低平な平坦地が続く三角州とは様相を異にしている。しかし、犬上川扇状地の末端部は条里制の遺構が明瞭に残されてきたことから知られるように古代以来の水田地帯であり、1200余年にわたる耕作によって原地形はかなり解消されており、さらに近年進められている大型圃場整備事業は地表の微起伏を著しく改変している。このため、現在の地表にはオリジナルな堆積面はまったく残されていないといっても過言ではない。

犬上川扇状地の南に続く愛知川扇状地(Ⅲ a 2)もまた、その主部は南隣の「近江八幡」図幅に含まれ、本図幅にはその先端部をわずかにのぞかせているにすぎない。扇状地の平均勾配はこれまた5/1,000前後ときわめて平坦であるが、愛知川流路に接する地区では明治時代までしばしば大規模な氾濫に見舞われたため、この地域としては規模の大きい自然堤防や旧流路沿いの微低地が交錯して微起伏の差が比較的顕著である。

芹川は本図幅の東端中央部に下流部の一部を見せているにすぎないが、その直線的な河道は近世初頭の彦根城下町建設にあたって掘削された人工河川で、それ以前の自然流路は彦根市中心市街の東部を北流して、かつての松原内湖に注いでいた。この芹川によって形成された三角州(Ⅲ a 3)には現在の彦根市中心市街が立地しており、地表の大部分は市街地造成のため盛り土されている。現在の芹川も時折り氾濫を繰り返し、両岸に小規模な自然堤防を形成している。湖岸には幅200~300mの砂礫堆(浜堤)が発達し、オーミケンシや鐘紡といった近代の大工場が立地している。

犬上川扇状地の北西にひろがる犬上川三角州(Ⅲ a 4)は主要地方道大津能登川長浜線付近までは北西に向って極めて緩やかに傾斜しており(勾配5/1,000未満)、水山高幸他のいう自然堤防帯に相当する。この地区では犬上川沿岸における自然堤防の発達が著しい。一方湖岸沿いには幅100~300mの狭長な砂礫堆(浜堤)が連

なり、後背湿地との比高1 m前後の微高地には湖岸の集落が立地し、畑地に利用されている。この砂礫堆と自然堤防帯の間には、かつての瀉湖が土砂で埋積された極めて低平低湿な湿地帯がみられ、埋積が十分に及ばなかった南西部には野田沼が水面を残している。この低湿地でも、彦根市街に隣接する犬上川下流右岸の大藪地区では近年宅地化の進行が著しく、埋立地が拡大している。

犬上川と愛知川の間を北西流する宇曾川は、谷口に近い「御在所山」図幅に含まれる地区では堆積地形を形成しているが、本図幅の範囲内では犬上川扇状地と同三角州、および愛知川扇状地と同三角州の接点にあたる低地をぬって流れる排水河川にすぎず、独自の堆積地形をほとんど形成していないため、この地形分類では独立の地形区を設定しないことにした。とはいえ、宇曾川沿岸にその堆積地形をまったく欠除しているという訳ではなく、小規模ながら自然堤防も散見され、狭いながらも宇曾川によって運ばれた土砂によって形成された三角州が存在することはいうまでもない。

愛知川三角州(Ⅲ a 5)は本図幅中最大の規模を有する三角州で、標高87~100 mの間の自然堤防帯と、標高83~87 mの三角州帯とに大別される。前者は愛知川右岸では北に向って、同左岸では西に向って緩傾斜しており、その平均勾配は2/1,000~3/1,000を測る。自然堤防は愛知川の現河道および旧河道に沿って分布し、現河道沿いのものは顕著な微高地を形成して森林や竹林に覆われている所が多いが、旧河道沿いのものは集落地にのみ残されているにすぎない。三角州帯はきわめて平坦な湿地帯で、埋め残された小さな瀉湖も散見される。琵琶湖に面する湖岸には砂礫堆(浜堤)が形成されているが、大中の湖承水路に面する湖岸は干潟になっている。

干拓地(Ⅲ a 6)は大中の湖、小中の湖、曾根沼といった旧内湖に造成された。これらの内湖はいずれも、湖東平野を形成した諸河川に対して湖東島状山地の影に相当する部分に位置し、埋積から取り残された水域が沿岸砂州によって閉鎖されて形成されたもので、水深は2~3 mにすぎなかった。干拓地の造成は第2次世界大戦中および戦後の食糧増産政策に沿って実施され、小中の湖の干拓は昭和18年に着工され、昭和21年に干陸した。総面積は300 haであるが、本図幅にはその北端のみが含まれている。大中の湖干拓地は昭和21年に着工されたが、昭和28年には台風13号による愛知川の氾濫で水没したため当初の計画を変更して工事を続

け、昭和39年に排水を完了した。総面積は1,300haに及ぶ。一方、曾根沼の干拓は昭和38年に着工し43年に完成した(干拓面積77.9ha)が、干拓されたのは旧稻枝町に属していた南西部のみで、彦根市域に含まれていた北東部は干拓をまぬがれて内湖の景観をとどめている。

### 湖西平野(Ⅲb)

湖西平野のうち安曇川<sup>あづみ</sup>によって形成された沖積低地の南部と鴨川下流の平野が本図幅に含まれる。このうち安曇川扇状地(Ⅲb1)は平均勾配4/1,000~5/1,000程度にすぎないのに対し、鴨川扇状地(Ⅲb2)の平配勾配は5/1,000~10/1,000とやや大きい。いずれも緩傾斜扇状地に属する低平なもので、扇状地面は条里制の遺構をよく残す水田地帯になっている。両扇状地の接点にあたる微低地を東流する青井川が両者を分けている。

標高87m付近の扇状地末端部から湖岸にかけて展開するのが三角州で、青井川と松ノ木内湖を結ぶ線以北を安曇川三角州(Ⅲb3)、以南を鴨川三角州(Ⅲb4)とした。いずれもきわめて平坦な低湿地であるが、地表を構成する粘土層はそれほど厚くなく、地下には砂礫層が厚く堆積している。安曇川三角州は安曇川本流とその分流によって埋積されたもので、湖岸付近には松ノ木内湖の瀉湖や五反田沼、十ヶ坪沼といった沼地をも残している。一方、鴨川三角州は鴨川本流とその分流ばかりではなく、比良山地北辺から流下する和田内川や小田川といった小河川による沖積低地をも含み、南端には乙女ヶ池と呼ばれる瀉湖が残されている。鴨川とその支流の八田川は顕著な天井川を形成し、和田打川と小田川も、小規模ながら流路の一部を天井川化している。

安曇川と鴨川、およびその支流の八田川沿いには自然堤防が形成されているが、本図幅内では湖東平野の愛知川や犬上川のものほど顕著ではない。湖岸には砂礫堆(浜堤)が発達して松林におおわれ、高島町の萩の浜は水泳場として知られている。安曇川と鴨川は河口に尖角状の砂礫堆を突出させて土砂供給の著しいことを物語っているが、安曇川河口のそれがもっぱら小円礫で構成されていることは注目に値する。

西隣の「北小松」図幅に主部を有する比良山地の東麓には、扇状地としては傾斜の強い複合扇状地が発達しており、その北端が本図幅の西辺、比良山地北東端の南麓に顔を出している。これが比良山麓複合扇状地(Ⅲb5)として急傾斜扇状地に

分類したもので、鵜川におけるその勾配は12%（傾斜7度）にも達しているが、土地利用上は水田が卓越している。

#### 参 考 文 献

- 水山高幸・池田碩・大橋健（1975）：湖東三山および周辺地域の地形 — 湖東三  
山地域学術調査報告書、滋賀県
- 水山高幸・池田碩・大橋健（1975）：近江盆地琵琶湖周辺の地形、建設省近畿地  
方建設局
- 国土庁土地局（1975）：縮尺20万分の1土地分類図（滋賀県）

教育学部 小林健太郎

### III 表 層 地 質

### Ⅲ 表層地質

#### 概 説

本図幅は滋賀県のはぼ中央部に位置し、その約3分の2が琵琶湖で占められている。したがって、調査地域は琵琶湖をはさんで北西側の高島郡の一部、及び南東側の彦根市から近江八幡市に至る地域と沖ノ島などの湖上の島とからなる地域である。

琵琶湖北西岸の高島地域では、白鬚神社の背後に白亜紀後期に貫入した花崗岩から成る比良山地の一角が琵琶湖にせまっている。この山地の北に広がる平野は、安曇川や鴨川によってもたらされた礫、砂および泥によって構成された沖積層から成っている。また、この沖積平野と白鬚神社背後の山地との境界に位置する高島町音羽地区など一部には、洪積世の古琵琶湖層と鴨川によって形成された河岸段丘が僅かに見られる。

一方、南東岸の彦根市から近江八幡市にかけての地域には、荒神山、和田山、猪子山が湖東平野の中で孤立した山体として見られ、図幅南端の近江八幡市の奥島山は琵琶湖に接している。さらに湖上には沖ノ島、沖の白石、多景島が浮んでいる。これらの山体は、ほとんど中生代白亜紀後期の火山活動によって形成された溶結凝灰岩と、それに伴って貫入した花崗斑岩とから成っている。これらは、かつていわゆる石英斑岩と呼ばれていたもので、現在では湖東流紋岩類と総称されている。また、多景島や奥島山の一部には花崗岩が分布している。

この地域の平野は全体として泥が優勢な沖積層で、湖岸沿いの約200mは砂が優勢となっている。特に、愛知川と犬上川の河口付近では、湖岸から400~800mの幅で砂が優勢となっている。また、荒神山の北東山麓や平野部の数箇所には、工場用地などの造成のためにかなり広い面積にわたって人工被覆された地区も見られる。

#### 1 未固結堆積物

##### 1-1) 礫がち堆積物

本図幅で礫がち堆積物としたのは、安曇川、犬上川、愛知川の現河床堆積物である。これら礫がち堆積物は湖西の安曇川では河口まで流出しているが、湖東の二河川の河床では河口まで達せず、河口付近は砂がち堆積物でいわゆる三角州堆積物となっている。

地下部では、愛知川や安曇川の両岸沿いや東海道線より上流部では、比較的厚い

礫がち堆積物が分布している。

### 1-(2) 砂がち堆積物

表層部の砂がち堆積物は、湖岸まで山地のせまる地域にはほとんど分布していないが、その他の地域では湖岸に沿って200m前後の幅で分布している。また河床の両岸にはほぼ帯状に分布し、河口部では広範囲に分布して三角州を形成している。

地下部では、一般に湖岸に近づくほど砂がち堆積物が優勢になっている。

### 1-(3) 泥がち堆積物

地表面では、田畑に利用されている大部分が泥がち堆積物でおおわれている。

地下では、一般に湖岸に近づくほど礫が減少し泥がち堆積物と砂がち堆積物との厚さが増大する。

曾根沼をはじめとする内湖の干拓、埋立地および湖岸に沿った沖積平野の地下では腐植土がかなりの割合で含まれている。

### 1-(4) 碎屑物

本図幅の北西部に位置する比良山地および平野部に孤立する山塊の斜面の一部には後背山地から供給された角礫状の巨礫を含む陶汰の悪い崖錐状の碎屑物が分布している。特に六甲変動<sup>\*</sup>によって激しい隆起が生じた比良山地山麓には各所に碎屑物が分布している。しかし本図幅に含まれる地域はそのごく一部にすぎず碎屑物の分布も狭い。

## 2 固結堆積物

本図幅域の固結堆積物は、湖東地域に分布する溶結凝灰岩と、その中に薄くはさまれた泥岩とである。溶結凝灰岩は、かつて石英斑岩と呼ばれたもので中生代白亜紀後期の火山活動による堆積物である。

荒神山<sup>きぬがさ</sup>、織山<sup>いのこ</sup>、猪子山、奥島山などの湖東平野にみられる孤立山体と湖上の沖ノ島は、主にこの溶結凝灰岩からなっており、河田清雄(1969)によって湖東流紋岩と総称されている。

荒神山の溶結凝灰岩はほぼ山体全域をおおうが、山体の北西側山麓の一部には、溶結凝灰岩の下位に位置して、幅約5m前後の黒色泥岩層が見られる。これらの岩石の露頭はかなり風化を受けたものが多いが、特に山体の西側半分が東側よりも風

---

\* 鮮新世から更新世にかけて西日本での堆積盆地の形成をひき起した地殻変動

化が深くまで達しているものと見られる。

図幅南端の奥島山及びこの山体の北に続く伊崎の小山塊は、溶結凝灰岩から成っているが、大部分が流紋岩質溶結凝灰岩で、この山体の北側に位置する宮ヶ浜の南東部には、石英安山岩質溶結凝灰岩が1 km<sup>2</sup>の広さでブロック状に分布する。両者は容易に識別できる。これらの岩石のうち石英安山岩質溶結凝灰岩は強く変成を受けていてかなり硬く、風化も軽微であるが、流紋岩質溶結凝灰岩の方は風化が進んでいる。

本図幅の東南端に見られる山体は、織山の北に続く猪子山および和田山の小山塊であるが、これらの山体の地質は、荒神山や奥島山と同一タイプの流紋岩質溶結凝灰岩である。

奥島山北方の湖上に浮ぶ沖ノ島の南半分にも奥島山や荒神山と同じ溶結凝灰岩が分布しており、島の北半分に見られる花崗斑岩と接している。接触部では花崗斑岩の貫入に伴う多少の熱変成作用を受けている。

### 3 花崗岩類

本図幅では、北西部地域の比良山地に花崗岩の分布が見られる。比良山地に広く分布する花崗岩類は黒雲母花崗岩がほとんどであるが、この地域の山地の北東斜面の一部には、中粒の黒雲母花崗岩中へ細粒の黒雲母花崗岩が貫入しているのが見られる。

一方、この山地の南西側、鶴川・明神地区背後の山腹の各所で、中粒黒雲母花崗岩中に発達したペグマタイト（巨晶花崗岩）が見られる。また、この地域の花崗岩類には節理が顕著に発達し、これに沿う風化作用の進行によって大きな岩塊が多量に生産されており、豪雨や地震などの際には、急激な土石流のおそれがある。

### 4 脈岩類

本図幅域の脈岩類は、荒神山、奥島山、沖ノ島に見られる花崗斑岩で、溶結凝灰岩中に貫入したものである。この貫入によって溶結凝灰岩はいくらかの熱変成作用を受けて硬化しているので、荒神山や奥島山、沖ノ島などは風化に抗する力が強く孤立峰として残存することができたものと考えられる。

この花崗斑岩は、1辺が2～5 mm程度の石英と長石の斑晶を含み、鈴鹿山脈西縁部に分布する犬上花崗斑岩（宮村・三村・横山（1976）、三村・片田・金谷（1976）、西川・西堀・小早川・但馬・辻・佐藤（1979））と呼ばれる脈岩類と同種で、同時期に貫入したものと考えられている。風化に対しては溶結凝灰岩よ



り抵抗力が弱いようである。

荒神山の西麓には、山体の下部に貫入している花崗斑岩が見られる。また、奥島山では山体の西部に、沖ノ島では北東－南西の方向に伸びた境界線を境にして北西側に、それぞれ花崗斑岩が貫入している。沖ノ島での花崗斑岩の貫入面は溶結凝灰岩と急傾斜で接している。

これらの花崗斑岩の一部には粗粒の斑状花崗岩状部分もあるが、本図幅北西部の湖西地域に見られる花崗岩とは明らかに区別できるものである。

## 5 節 理

### 5-1) 溶結凝灰岩

溶結凝灰岩中には、節理がかなりよく発達している。その走向は、沖ノ島およびその南方の奥島山一帯では南北および東西性であり、傾斜は急角度の場合が多い。

荒神山付近では、東西および南北性の節理の他に北西－南東方向のものもあり、傾斜は、この地域でも急角度である。

猪子山および和田山では、沖ノ島と同様に南北および東西性で、傾斜も急角度である。

### 5-2) 花崗斑岩

沖ノ島および奥島山に分布する花崗斑岩中の節理は、北西－南東方向および北東－南西方向のものが卓越し、その傾斜はいずれも急傾斜である。

## 参 考 文 献

- 宮村学・三村弘二・横山卓雄（1976）：彦根東部地域の地質，地質調査所  
滋賀県高等学校理科教育研究会湖東ブロック火曜会（1975～1980）：滋賀科学，  
滋賀県高等学校理科教育研究会  
滋賀自然環境研究会（1979）：滋賀県の自然，滋賀県自然保護財団

### 調査参加者

滋賀大学教育学部 立 川 正 久

滋賀地学研究会

平 尾 藤 雄	藤 本 秀 弘	但 馬 達 雄
小早川 隆	雨 森 清	田 村 幹 夫
西 村 徹	武 田 信 夫	伊 藤 克 己
小 椋 俊 道	辻 一 信	西 堀 剛
西 川 一 雄	上 田 重 衛	三 矢 信 昭
堤 康 郎	橋 本 雅 昭	前 田 康 一
宮 居 伝	北 村 晃	西 田 順 子

## IV 土 壤

1 林 地 土 壤

2 農 地 土 壤

## Ⅳ 土 壤

### 1 林地土壤

#### 1-(1) 林地土壤概設

本図幅における陸域は琵琶湖をはさんで、湖西と湖東にわかれている。147㎢を占める陸地面積の大部分が低平地であり、主として農地と住宅地として利用されており、林地は、陸域の約10%を占める山地と丘陵に限られている。林地としてのまとまった分布は、湖西では比良山系北東端の見張山地と高島丘陵、湖東では奥島山、<sup>きぬがさ</sup>織山、和田山、荒神山などの島状山地<sup>※</sup>および湖上に浮かぶ沖ノ島にある。

これらの山地や丘陵を被覆している土壤は、その大部分が褐色森林土壤であり、一部に赤黄色土壤を伴っている。これらの土壤は、それぞれの区域を構成する地質母材のちがいや、地形・気候・動植物などの土壤生成環境のちがいによって、見掛けや性格を異にしている。この調査では、土壤断面、ことに層位区分ごとの厚さ、色調、粒度、構造、乾燥のちがいから、地域の山地・丘陵の土壤を、乾性褐色森林土壤（赤褐色系）、乾性褐色森林土壤（黄褐色系）、弱乾性～適潤褐色森林土壤、および赤色土壤の4つの土壤統群に区分した。これらの土壤統群は、その母材地質のちがいによってさらに7土壤統に細分できる。（P.39「林地土壤一覧」参照）

本図幅の林地土壤の中で最も分布の広いのは、乾性褐色森林土壤（黄褐色系）である。この土壤は山地・丘陵の一般斜面に普遍的に出現し、黄褐色を呈し、細粒で、有機質をもち、腐植の下層への浸透がやや弱く、林地としての生産性は中程度であり、乾燥の強いところでは、アカマツ、やや弱いところではヒノキが生えている。山地・丘陵の山頂小起伏面、高起状を呈している所、および丸味を帯びた尾根筋は、乾性褐色森林土壤（赤褐色系）が分布している。これは粘質・緻密で有機質に乏しく、林地としての生産性は低い。この土壤よりさらに赤味が強く、強粘～粘質で有機質に乏しい土が、奥島山の東部丘陵一帯に分布している。これを赤色土壤と呼ぶ。赤褐色系乾性褐色森林土壤とともに過去の地質時代の温暖気候下の産物と考えられている。

山地・丘陵の谷筋から山麓にかけては、石礫含量が高く、乾性褐色森林土壤より

---

※湖東島状山地……湖東平野の中央部に散在する島状の小山

も腐植を多く含み、下層への腐植の浸透のよい褐色森林土壌（弱乾性～適潤性）が分布している。この土壌は、本図幅中の林地土壌では、最も生産性の高いものであるが、残念なことにその分布面積は狭い。

なお、これらの土壌は、いずれも褐色森林土壌群に一括されるが、湖西のものは、花崗岩質岩石を母材としていて残積性未熟土に移化するものが少なくない。湖東のものは、流紋岩質溶結凝灰岩またはその下位の泥質堆積岩を母材としていて、一般に細粒緻密なものが多い。

#### 1-(2) 林地土壌細説

縮尺5万分の1「彦根西部」図幅の山地・丘陵に分布する土壌は、2土壌群、4土壌統群、7土壌統に区分される。また、低地における例外的な林地は琵琶湖の湖岸に沿って細長く分布する浜汀列にあり、未熟土が発達している。これらの内容は、次のとおりである。

縮尺5万分の1「彦根西部」図幅林地土壌一覽

土壌群	土壌統群	土壌統	分布地および出現地形	母材	主要植生	林野記号
	乾性褐色森林土壌 (赤褐系)	奥島統	湖東島状山地の高起伏を呈している所および丸味をもった尾根(荒神山、奥島山、沖ノ島)	流紋岩類(溶結凝灰岩とこれに伴う泥質堆積物)	天然性アカマツクマツ	BA
		鵜川統	比良山地北東端の山頂小起伏面(高島丘陵の丘陵背面)	花崗岩類の風化物	"	"
褐色森林土壌	乾性褐色森林土壌 (黄褐系)	荒神山統	湖東島状山地の一般斜面	流紋岩類と斑岩、頁岩、砂質岩	天然性アカマツクマツヒノキ	BB
		勝野統	比良山地の一般斜面、急斜面では未熟で岩肌が出る。	花崗岩類の風化物	"	"
赤黄色土壌	褐色森林土壌 (適潤～弱乾性)	猪子山統	湖東島状山地の中の谷筋	流紋岩類の岩屑	天然性アカマツクマツヒノキ、サギ	Bc~BD(d)
		高島統	比良山地山麓から幅広い谷	花崗岩の岩屑	"	"
未熟土	砂丘未熟土壌	伊崎新海統	湖東島状山地の中の一部(奥島山の東部丘陵性山地)湖岸の浜堤	流紋岩類の風化残積物 沿岸流砂	天然性アカマツクマツ アカマツ粗林	R

## ① 褐色森林土壌

### (ア) 乾性褐色森林土壌（赤褐色系）

赤褐色系の乾性褐色森林土壌は、湖西の見張山地の山頂小起伏面と幅広い尾根、および湖東の島状山地の高起伏を呈している山地に分布している。一般に表層は、褪色して褐色（7.5YR-4/4）を呈するが、下層は明赤褐色（5YR6/6）となっている。出現地形と土層断面の状態から、この土壌は、過去の気候条件下で形成されたものが、その後の浸食作用を免かれて傾斜面に温存されたものと見ることができる。この土壌は、いわゆる残積性赤熱土に近く、理学的性質が悪く、腐植の浸透もほとんどない。主な植生は、アカマツの粗林であるが、生育は概して悪い。

この土壌は、地質母材のちがいでによって、未熟度が異なり、次の土壌統に細分される。

奥島統；湖東流紋岩類の下部を構成する頁岩などの堆積岩を母材として、奥島山、沖ノ島および荒神山の尾根筋に出現する。表層はやや軟質の腐植層に覆われているが、その層は乏しく、下層に移行するにつれ緊密となり、物理性は良好でない。A層は薄く、腐植層の下にB層が現われ、林地としての生産性は低い。

鶴川統；湖西の花崗岩質岩石の風化物を母材とし、山頂小起伏面や、比較的幅のせまい急峻な尾根筋に出現する。乾燥の影響を強く受け、乾性細粒状構造が発達するが、腐植の発達やその下層への浸透は悪い。B層以下が赤色風化殻の深いところと、灰黄褐色に変わり未熟土の傾向を示すところがある。

### (イ) 乾性褐色森林土壌（黄褐色系）

黄褐色系の乾性褐色森林土壌は、山地、丘陵の一般斜面に普遍的に出現し、本図幅内の林地土壌の中では、分布面積が最も広い。

土壌断面を見ると、層位の分化がある程度進んでいて、全体に明るい色調（10YR5/5）を呈している。下層は、熟度が低く、全般に未熟土の要素を多分に含んでいる。

この土壌は、地質母材のちがいでから、次の土壌統に細分されている。

荒神山統；湖東の荒神山と沖ノ島の斜面、および奥島山の一般斜面の丸みを帯びた地帯に分布する黄褐色系の土壌で、湖東流紋岩下位の頁岩などの堆積岩を母材としている。表層はやや軟質の腐植層に覆われているが、下層は緊密で、物理性が良好でなく乾燥している。林地としての生産性は低い。

勝野統；湖西の丘陵性山地の一般斜面を代表する黄褐色系の土壌で、傾斜地の上部や、尾根筋を除いた斜面に広く出現し、花崗岩質岩石を母材としている。尾根型土壌である鶉川統と比較すれば、腐植の浸透はやや深い、全般には灰黄褐色を呈し、未熟土の要素が残っている。斜面の中腹は、天然性アカマツ林、下方の一部は、スギ、ヒノキの造林地となっている。

#### (ウ) 褐色森林土壌（弱乾性～適潤性）

この土壌は、山地、丘陵の凹形斜面もしくは谷部に分布し、谷部の上部から下部にかけて細長く出現することが多い。谷部にあるため、褐色森林土壌の尾根型乾性（赤褐～黄褐色）土壌にくらべると水分も多く、有機物の混入も認められる。また、土層全体に礫の混入があるが、尾根型乾性土壌との境界が不明瞭な場合が少なくない。

一般には、土層は比較的厚く、腐植の下層への浸透がややよい。乾性褐色森林土壌にくらべるとヒノキの生育もよい。

猪子山統；湖東流紋岩を母材とする褐色森林土壌（弱乾性～適潤性）の代表で、猪子山、奥島山および荒神山の谷部の上下に帯状に長く出現する。腐植の浸透は比較的よく、土層も深い。腐植の集積はあまり顕著ではないが、A層には団粒構造の発達が見られる。石礫含量は高く、埴質で粘りは強い。植生はアカマツの天然林が主体となっている。

高島統；鶉川統、勝野統と同じ、湖西の花崗岩質岩石を母材とした谷型褐色森林土壌である。概して石礫含量が高く、排水条件にめぐまれていて、スギ、ヒノキの生育は、悪くない。

## ② 赤色土壌 — 伊崎統

赤色土壌は、奥島山の東側に南北に伸びる標高250m以下の丘陵全域に分布し、一段と赤味の強い（2.5YRより赤い）土壌である。概して、粘質・緻密であり、透水・保水性は中程度であるが、干ばつ時には、過干のおそれがある。腐植含量が少なく、林地としての生産性は低い。

赤色土壌の成因については、いまだ充分明らかではないが、過去の地質時代における熱帯的気候条件下で形成されたいわゆる赤色古土壌であると考えられている。赤色土壌と同様の成因とされている赤褐色乾性褐色森林土壌が、これとは対照的に赤味が薄く、高起状を呈している所や尾根筋に浸食を免かれて、かろうじて断片的



に分布していることは、これらの成因を考えるうえで興味深い。

### ③ 砂丘未熟土壌 — 新海統

琵琶湖の湖岸に沿って細長く分布する浜汀には、幅20mもしくはそれ以下のアカマツ林が連なっている。この林地は、低地における例外的存在であるが、この林地土壌が、砂丘未熟土壌である。粗粒の熟土の低い砂からなり、林地としての生産性は低いが、自然環境保全上並木の保護は考える必要があるだろう。

#### 1-(3) 土地利用の現況

調査地域は森林植物帯上、暖帯北部に属するが、固有の林相を呈する天然林は早くから伐採されて、現在ではアカマツを主とする二次林的な天然生林が広く分布している。

ヒノキを混ざるアカマツ林もあるが、大部分はアカマツ単純林で、万木にソヨゴ、ヤマウルシ、ヒサカキ、アラカシ、ツバキ、シャシャンボ、モチツツジ、コバノミツバツツジ、ネジキ、リョウブ、タカノツメ、ゴンゼツ、クリ等の落葉および常緑の広葉樹を混じている。

#### 1-(4) 土壌と土地利用

乾性褐色森林土壌（黄褐色系）の分布区におけるアカマツ天然生林は中等程度のものであるが、1m-BB型土壌の地域ではアカマツの生育は一般に良好でなく、BB型土壌より劣っている。

この地域は、経済林地としての利用度は低く、スギ、ヒノキの成林を期待することは困難であり、天然更新によりアカマツ林を仕立てることが適当と考えられる。

もしヒノキを造林するならば、崩積土のところに限るべきであるが、生育が緩慢であるのでかなり長期間を予想しなければならず、また、アカマツの侵入がいちじるしいので、保育に経費を要すると思われる。

これに対して、赤褐色系の乾性褐色森林土壌の分布区は、背尾根ないし急な凸斜面に分布しているものが多く、土地の改変には適していない。この地域は、透水性の悪い密な土層となっているため、表面流が生じ易く、これに伴う土壌侵蝕防止に留意すべき点が大きく、林木生育の上からも広葉樹の導入、または積極的に肥料木の混植を行うことが望ましい。

適潤性褐色森林土壌は、従来ヒノキの造林地として利用されているが、緩斜面、平地の周辺部では、一部スギの造林もみられる。植栽されたヒノキはBD型土壌で

最も良好な生育となり、B<sub>D</sub>(d)型土壌およびB<sub>c</sub>型土壌でも比較的生育が良好である。

しかし、B<sub>B</sub>型土壌の地域に植栽されたヒノキは、生育が比較的緩慢で、後から侵入したアカマツのために圧せられていて、一見アカマツ林の様相を呈しているものが少なくない。

#### 参 考 文 献

- 滋賀県自然保護財団(1979)：滋賀県の自然国立林業試験場(1961)：林野土壌とそのしらべ方、林野弘済会
- 宮崎榊(1958)：森林土壌の見わけ方、林業改良普及協会
- 国立林業試験場(1957)：大阪営林局土壌調査報告書、林野庁
- 国土庁土地局(1975)：縮尺20万分の1土地分類図(滋賀県)
- 滋賀県林務課：民有林適地適木調査報告書

(滋賀県森林センター 古川政伯)

## 2 農地土壌

### 土壌区分

農地土壌の分類は、地力保全基本調査成果をもとに都道府県土地分類基本調査作業規程に基づいて土壌区分を行い、全国統一土壌統および土壌統番号で示した。

土壌統の設定は、断面形態、母材、および堆積様式の異同を決定する項目ごとの区分基準によった。本図幅に関係する土壌統は、次表の末尾に要約するとおり、腐植層序、土色層序、土性、礫層・砂礫層、斑紋結核、構造、泥炭層およびグライ層の状態によって設定した。

土 壤 統 区 分 の 基 準

全国土壤統番	土壤統名	腐植	土色	礫層 砂礫層	斑紋	結核
褐色低地土壤						
1202	新 戒	表層腐植層なし	黄 褐	なし	なし	なし
1203	芝	"	"	"	"	"
1204	飯 島	"	"	"	"	"
1206	二 条	"	"	30~60cm以内	"	"
1207	外 城	"	"	0~30cm以内	"	"
1208	中 島	"	"	なし	あり	"
1211	江 刺	"	"	"	"	あり
灰色低地土壤						
1302	四 倉	表層腐植層なし	灰	なし	あり	なし
1303	佐 賀	"	"	"	"	あり
1305	か 嶋	"	"	"	"	なし
1306	たから 宝 田	"	"	"	"	あり
1307	か 加 茂	"	"	"	"	なし
1308	きよ 清 武	"	"	"	"	あり
1309	とよ 豊 中	"	"	"	"	なし
1310	く 久 世 田	"	"	30~60cm以内	"	-
1311	おつこの 追子野木	"	"	"	"	-
1312	こ 国 領	"	"	0~30cm以内	"	-
1313	もろ 諸 橋	"	灰 褐	なし	"	なし
1315	かね 金 田	"	"	"	"	"
1316	た多 たら良	"	"	"	"	あり

土 性	構 造	泥炭層	グライ層	母 材	堆積様式	主な土地 利 用
粘	—	なし	なし	非固結堆積岩	水 積	畑
壤	—	"	"	"	"	"
砂	—	"	"	"	"	"
壤～砂	—	"	"	"	"	"
—	—	"	"	"	"	"
強 粘	—	"	"	"	"	水 田 (畑)
粘	—	"	"	"	"	"
強 粘	あり	なし	なし	非固結堆積岩	水 積	水 田
"	"	"	"	"	"	"
粘	"	"	"	"	"	"
"	"	"	"	"	"	"
壤	—	"	"	"	"	"
"	—	"	"	"	"	"
砂	—	"	"	"	"	"
強粘～粘	—	"	"	"	"	"
壤～砂	—	"	"	"	"	"
—	—	"	"	"	"	"
強 粘	あり (なし)	"	"	"	"	"
粘	"	"	"	"	"	"
"	"	"	"	"	"	"

全国土壤番号	土壤統名	腐植	土色	礫層 砂礫層	斑紋	結核
グライ土壤						
1401	ふそき 富曾亀	表層腐植層 なし	青 灰	なし	30cm以下 なし	—
1402	たがわ 田川	"	"	"	"あり	—
1403	にしや 西山	"	"	"	"なし	—
1404	ひがしうら 東浦	"	"	"	"あり	—
1405	しばい 芝井	"	"	"	"なし	—
1406	たきお 滝尾	"	"	"	"あり	—
1407	ことば 琴浜	"	"	"	"なし	—
1408	かたぎ 片桐	"	"	"	"あり	—
1411	えべす 蛭子	"	"	30~60cm以内	"なし	—
1413	りゆうほく 竜北	"	"	0~30cm以内	" "	—
1414	おおお 大洲	"	"	0~30cm以内	"あり	—
1415	はくくら 保倉	"	灰色/ 青灰	なし	あり	なし
1416	はたの 幡野	"	"	"	"	"
1418	ちとせ 千年	"	"	"	"	"
1419	あそりず 浅津	"	"	"	"	"
1421	にい 新山	"	"	"	"	"
1423	やわた や八幡	"	"	"	"	"
1428	よねさと 米里	"	青 灰	"	あり (なし)	—

- (1) 腐植層序：この図幅の土壤の腐植含量は5%未満で表層腐植層なしに該当。
- (2) 土色層序：土層1mについて、作土下の層位（おおむね25~60cm）の湿土の基質の色により区分。
- (3) 礫層・砂礫層：礫層は、土壤断面において面積割合20%以上を礫で占め、細土の土性が土質またはそれより細かく、厚さはおおむね20%以上。砂礫

土性	構造	泥炭層	グライ層	母材	堆積様式	主な土地利用
強粘	なし	なし	全層または作土を除くほぼ全層	非固結堆積岩	水積	水田
"	—	"	"	"	"	"
粘	なし	"	"	"	"	"
"	—	"	"	"	"	"
壤	なし	"	"	"	"	"
"	—	"	"	"	"	"
砂	—	"	"	"	"	"
"	—	"	"	"	"	"
壤～砂	—	"	"	"	"	"
—	—	"	"	"	"	"
—	—	"	"	"	"	"
強粘	なし	"	ほぼ作土下から80cm以内	"	"	"
"	あり	"	"	"	"	"
粘	なし	"	"	"	"	"
"	あり	"	"	"	"	"
壤	なし	"	"	"	"	"
砂	"	"	"	"	"	"
強粘	—	おおよそ30cm以下	上層50cm以内に厚さ20cm以上	非固結堆積岩 植物遺体	水積/集積	"

層は、土性が砂質のほかは礫層と同じ。

(4) 斑紋結核：斑紋は、鉄、マンガンの酸化沈積物のことで、「有り」はこれを断面積の2%以上占める割合。マンガン結核は、マンガンを主成分とする結核状の酸化沈積物。

(5) 土性：

強粘質-HC、LiC、SiC、SC（粘土含量35%以上）

粘 質 - SiCL、CL、SCL (粘土含量 15~35%未満)

壤 質 - SiL、L、SL (粘土含量 0~15%未満)

砂 質 - S、LS (砂含量 85%以上)

(6) 構造：土層中の連続した割目のことで、構造面が明瞭であるもの。

(7) 泥炭層：湿地植物の遺体が集積し、植物組織が肉眼で識別できる層で、腐植含量 20% 以上。

(8) グライ層：土壤還元による 2 価鉄の存在を示す、 $\alpha \cdot \alpha^1$ ジピリジル反応が即時鮮明な土層。出現位置 80cm 以内で有りとする。

強グライ・全層または作土を除くほぼ全層がグライ層。

グ ラ イ・ここでは 30cm から 80cm までにグライ層が現われるものとした。

## 1 農地土壤の概要

農地の大部分は水田で占め、畑は琵琶湖の湖岸部にまとまって分布がみられるほかは、小面積で点々として存在するにすぎない。

水田および畑土壌の分類に当っては、表面から 1 m までの土層の形態的特徴を類別して、分類上の単位を土壤統にとり区分を行った。

各河川の中流部に分布する水田土壌の多くは灰色低地土壌であり、これより琵琶湖までの水田はグライ土壌もしくは強グライ土壌からなっている。

土性についてみると、湖岸は波の巻上げにより堆積したとみられる砂質土壌が帯状に分布し、琵琶湖東岸では畑地として利用されるところが少なくない。

えちがわ 愛知川兩岸の川岸に近い部分は壤質の水田が大半を占め、川岸からやや距離をおいて粘質、次いで強粘質へと土性に変化が認められる。愛知川の右岸で愛知川町愛知川から西長野までの間、および彦根市服部町の周辺部は砂礫層が高い位置にあり、ここからの流出が愛知川町の西部および彦根市稲枝地区の土地の生成に対し大きく影響したことが、土性の変化によく現れている。

宇曾川右岸から芹川までの地域は粘質土および強粘質土が大半を占め、壤質土および砂礫質土は少ない。

湖西の高島町は主として壤質土、砂質土、礫質土からなっている。ただし、宮野の東部には黒ボク混りで粘質の灰色低地土壌（灰褐系）が認められる。これは、鴨川による浸蝕作用や堆積作用を受けることが少なかったとみることができる。

鴨川左岸と安曇川右岸の安曇川町青柳、上小川は、主として礫質土からなり、これを中心として下流部に壤質土、粘質土、強粘質土がドーナツ状に分布する。青柳、上小川よりも上流部は粘質土および強粘質土となっており、これらの土性分布から、下流部の低地土が安曇川および鴨川の流入によって形成されたと考えられる。

安曇川右岸部は壤質、粘質、強粘質で、ここでも土壤粒径に堆積順序が認められる。

## 2 水田土壤統

### 2-1) 褐色低地土壤 Brown lowland soil

(細粒褐色低地土壤・斑紋あり)

1208 <sup>なかじま</sup>中島統 Nakajima : 主要な土層は黄褐色を呈し、土性は強粘質で斑紋があることを特徴とする。

彦根市の犬上川上流域に分布する。表層は灰色で粘質である。

1211 <sup>えさし</sup>江刺統 Esashi : 主要土層は黄褐色で、土性は粘質、斑紋およびマンガン結核があることを特徴とする。

犬上川左岸上流部で、前記中島統の上流域に分布する。表層は灰色、全層ほぼ粘質の水田が多い。

### 2-2) 灰色低地土壤 Gray lowland soil

(細粒灰色低地土壤・灰色系)

1302 <sup>よつくら</sup>四倉統 Yotsukura : 主要な土層は灰色を呈し、土性は強粘質、斑紋および構造があることを特徴とする。

彦根市の犬上川右岸上流域、彦根市稻枝地区、愛知川町および能登川町に分布し、全層ほぼ灰色、作土および作土下の一部が粘質の水田が多い。

1303 <sup>さが</sup>佐賀統 Saga : マンガン結核があるほかは四倉統と同じ。四倉統と佐賀統は混在する。

1305 <sup>かもじま</sup>鴨島統 Kamojima : 主要な土層は灰色を呈し、土性は粘質、斑紋および構造があることを特徴とする。

豊郷町を中心として分布する水田は全層ほぼ粘土質である。彦根市の1418千年統または1419 浅津統との境界に近い部分には、ほぼ60 cm以下に壤質、砂質、または礫質の現われる水田が点々として存在する。

愛知川町、彦根市稻枝地区および能登川町に分布する水田で四倉統との境界に近



いところでは、かなり高い位置に強粘質が現われる。

安曇川町に分布する水田の一部はほぼ 60 cm 以下で強粘質または礫層があらわれる。

1306 <sup>たからだ</sup> 宝田統 Takarada : マンガン結核があるほかは鴨島統と同じ。鴨島統と混在することがある。

(中粗粒灰色低地土壌・灰色系)

1307 <sup>かも</sup> 加茂統 Kamo : 主要な土層は灰色を呈し、土性は壤質で斑紋があることを特徴とする。

能登川町および高島町に分布する水田は、60 cm 以下の下層が砂質のものが多い。

1308 <sup>きよたけ</sup> 清武統 Kiyotake : マンガン結核があるほかは、加茂統と同じである。

1309 <sup>とよなか</sup> 豊中統 Toyonaka : 主要な土層が灰色を呈し、土性は砂質で斑紋があることを特徴とする。

大中の湖干拓地の湖岸から、彦根市柳川に至る湖岸部に帯状に分布する。作土は壤質で 20 cm ~ 30 cm で砂層となる。

(礫質灰色低地土壌・灰色系)

1310 <sup>くせだ</sup> 久世田統 Kuseda : 主要な土層は灰色を呈し、土性は粘質で斑紋があり、30 cm ~ 60 cm 以内から礫層または砂礫層となることを特徴とする。

秦荘町目加田の東部、彦根市南川瀬町の南部、同楡町の東部、同彦富町の北部に分布し、礫層の細土の部分は粘質または壤質である。安曇川町に分布するものは砂礫層である。

1311 <sup>おつこのぎ</sup> 追子野木統 Okkonogi : 主要な土層は灰色を呈し、土性は壤質で斑紋があり、30 ~ 60 cm 以内から礫層または砂礫層となることを特徴とする。

彦根市服部町の周辺、愛知川町愛知川の東部および高島町に分布する。

1312 <sup>こくりお</sup> 国領統 Kokuryo : 主要な土層が灰色を呈し、土性は壤質で斑紋があり、30 cm 以内で礫層および砂礫層となる。

愛知川町東長野を中心に分布がみられるほか高島町打出にあるものは細礫である。

(細粒灰色低地土壌・灰褐色系) (Grayish brown lowland soil)

1313 <sup>もろはし</sup> 諸橋統 Morohashi : 主要な土層は灰褐色を呈し、土性は強粘質で斑紋があることを特徴とする。

秦荘町に分布し、作土は灰色である。

1315 <sup>かねだ</sup> 金田統 Kaneda : 主要な土層は灰褐色を呈し、粘質で斑紋があること

を特徴とする。

豊郷町および甲良町のほぼ国鉄新幹線の東部に広く分布する。作土は灰色で全層ほぼ粘質である。高島町にあるものは黒ボク土が混じる。

1316 多多良統 Tataru : マンガン結核があるほかは 1315 金田統と同じ。

### 2-(3) グライ土壌

(細粒強グライ土壌)

1401 富曾亀統 Fusoki : 全層または作土を除く全層がグライ層で、土性は強粘質、30 cm 以下に斑紋がないことを特徴とする。湿田の性格がもっとも強い水田である。

大中の湖干拓地の西部に分布する水田は粘土含量がもっとも高いHCである。彦根市、能登川町および安曇川町に分布する水田は全層または作土下がLiCである。

1402 田川統 Tagawa : 30 cm 以下に斑紋があるほかは、1401 富曾亀統と同じ。

彦根市および安曇川町に広く分布する。湖辺からやや遠い水田は作土および作土下の一部が粘質となっている。

1403 西山統 Nishiyama : 全層または作土を除く全層がグライ層で、土性は粘質、30 cm 以下に斑紋がないことを特徴とする。湿田の性格がもっとも強い。安曇川町に一部分布がみられる。

1404 東浦統 Higashiura : 30 cm 以下に斑紋があるほかは 1403 西山統と同じ。

彦根市、能登川町、および安曇川町に分布し、強粘質土壌との境界に近い水田は下層に強粘質が現われる。

(中粗粒強グライ土壌)

1405 芝井統 Shibai : 全層または作土を除く全層がグライ層で、壤質、30 cm 以下に斑紋がなく、湿田の性格がもっとも強い。

1406 滝尾統 Takio : 30 cm 以下に斑紋があるほかは芝井統と同じ。

能登川町に分布する水田は、愛知川から遠ざかるにつれ、全層の土性が壤質から粘質側に移行する。

高島町および安曇川右岸に分布する水田のなかには、60 cm よりも下層が砂質のものもある。高島町鯉川の周辺には、きわめて幅狭く粘質土の水田が含まれる。

1407 <sup>ことばま</sup>琴浜統 Kotohama : 全層または作土を除くほぼ全層がグライ層で、砂質、30 cm 以下に斑紋がないことが特徴である。湿田の性格がもっとも強い。

高島町に分布するものの中には表層壤質で一部は下層に斑紋がある片桐統の水田も含まれる。

1408 <sup>かたぎり</sup>片桐統 Katagiri : 30 cm 以下に斑紋があるほかは、琴浜統と同じ。能登川町にあるものは作土が壤質で25 cm 以下が砂質となっている。

( 礫質強グライ土壌 )

1411 <sup>えべす</sup>蛭子統 Ebesu : 全層または作土を除くほぼ全層がグライ層で、土性は壤質、30 cm 以下に斑紋がなく、30 cm~60 cm 以内で礫層または砂礫層となることが特徴である。湿田の性格がもっとも強い。

愛知川町の一部および安曇川町にまとまって分布し、上層は壤質、ほぼ40 cm で砂礫層となる。

1413 <sup>りゅうほく</sup>竜北統 Ryūhoku : 全層がグライ層で砂礫層が30 cm 以内にある。安曇川町四津川の干拓地に分布する。

1414 <sup>おおす</sup>大洲統 Ōsu : 全層がグライ層で砂礫層が30 cm 以内にあり、斑紋がある。

高島町に分布するものは作土が壤質で、20 cm で砂礫層となる。高島町に分布するものには一部砂礫層の位置が低い水田を含む。また大字打下の水田は細礫である。

( 細粒グライ土壌 )

1415 <sup>ほくら</sup>保倉統 Hokura : おおむね30 cm 以下がグライ層で、土性は強粘質、斑紋は認められるが、構造がないことを特徴とする。

能登川町の一部に分布が認められる。

1416 <sup>はたの</sup>幡野統 Hatano : 構造があるほかは保倉統と同じ。

大中の湖干拓地、能登川町福堂、彦根市、愛知川町および安曇川町の安曇川左岸部に広く分布する。

大中の湖の水田はもっとも粘土含量が多いHCで、他の地域のものは主要な土層はLiCで、作土が粘質の水田も多い。彦根市薩摩町から三津屋町に至る湖岸部では、畑地に沿って、きわめて幅狭く下層の一部が砂質となっている。

1418 <sup>ちとせ</sup>千年統 Chitose : おおむね30 cm 以下がグライ層で、土性は粘質

彦根市においては構造がある浅津統と混在して広く分布する。安曇川町にも分布がみられる。

1419 <sup>あそりず</sup>浅津統 Asōzu : 構造があるほかは千年統と同じ。

(中粗粒グライ土壌)

1421 <sup>にいやま</sup>新山統 Niiyama : おおむね 30 cm 以下がグライ層で、土性は壤質、下層に斑紋があり、構造がないことが特徴である。

愛知川町の愛知川右岸および高島町にやや広く分布する。強グライ土壌からグライ土壌に変化する過程にあるとみられる。

1423 <sup>やわた</sup>八幡統 Yawata : おおむね 30 cm 以下がグライ層で、土性は砂質で斑紋があることが特徴である。

大中の湖干拓地において、東部承水構および小中の湖堰堤に沿い、円弧をえがくように分布する。外周部は表層が壤質でほぼ 25 cm 以下が砂質である。内側の表土は粘質で、砂層の位置はやや低下する。

曾根沿干拓地では、表層は粘質または壤質で、ほぼ 20 cm 以下が砂質となっている。東部の半分は下層の一部が泥炭質で、西側の一部は下層が砂礫層の水田もある。

(グライ土壌・下層有機質)

1428 <sup>よねさと</sup>米里統 Yonesato : 表層 50 cm 以内に厚さ 20 cm 以上グライ層があり、土性は強粘質、下層泥炭層の土層が特徴である。

大中の湖干拓地に分布する水田はグライの位置が 30 cm 以下であり、小中の湖は強グライとなっている。

地図に記入できるほどの面積ではないが、下層泥炭層は野田沼および曾根沼周辺の一部の水田にみられる。

### 3 畑地土壌統

褐色低地土壌 Brown lowland soil

(細粒褐色低地土壌・斑紋なし)

1202 <sup>しんかい</sup>新戒統 Shinkai : ほぼ全層が黄褐色を呈し、土性は粘質であることが特徴である。

高島町北船木の安曇川河口に分布する畑地は下層に斑紋があるものも含まれる。

(中粗粒褐色低地土壌・斑紋なし)

1203 <sup>しば</sup>芝統 Shiba : ほぼ全層が黄褐色を呈し、土性は壤質であることが特徴

である。

1204 <sup>いじま</sup>飯島統 Iijima : ほぼ全層が黄褐色を呈し、土性は砂質であることが特徴である。

( 礫質褐色低地土壤・斑紋なし )

1206 <sup>にじょう</sup>二条統 Ni jyo : ほぼ全層が黄褐色を呈し、土性は壤～砂質で、30cm～30cm以内から礫質となることが特徴である。

1207 <sup>とじょう</sup>外城統 To jyo : ほぼ全層が黄褐色を呈し、30cm以内に礫層があることを特徴とする。

#### 参 考 文 献

農林省農産園芸局(1969) : 地力保全対策要綱

松坂泰明(1969) : 本邦水田土壤の分類に関する研究、農技研報告書B20号  
155～349

国土庁土地局(1975) : 縮尺20万分の1土地分類図(滋賀県)

滋賀県農業試験場(1966～1976) : 水田および畑地土壤生産性分級図

滋賀県農業試験場(1963～1971) : 施肥改善事業調査研究成績書

( 滋賀県農業試験場 澤 重 孝 )

## V 土地 利用 現 況

## V 土地利用現況

### 1 農 地

本図幅の東南部は湖東平野の北部に当り、農地の大部分が水田であり、畑地については一部湖岸沿いにみられる程度である。この地域は広範囲に渡っては場整備事業が行われており、また、稲作にとって比較的良好な土壌に恵まれている。作物はく稻（近江米）が中心であるが、近年水田利用再編対策として、大豆、麦等の穀物や野菜類の生産も行われている。また、戦後、食糧増産のため、農用地開発事業として琵琶湖の内湖や入江の干拓が行われたが、本地域内に県下最大の中の大中の湖干拓地があり、ここでは水稻を中心に野菜、畜産等の複合経営が大規模に行われている。これらの干拓事業は、びわ湖を中心とした自然環境保全の見地から、昭和46年以降実施されていない。

また、図幅の北西部は湖西平野の南部にあたり、水田が農地の大部分を占め畑地は湖岸に点在する程度である。この地域では水稻のほかキャベツ等の野菜が栽培されている。

※ なお、土地利用現況図における水田の区分については、乾田、半湿田、湿田に細分した。細分基準は、湿田を強グライ土、半湿田をグライ土、乾田を灰色低地土および褐色低地土とした。ただし、愛知川町愛知川北西部の1312国領統および高島町出鴨の東部に分布する1311追子野木統の水田は、砂礫層中の地下水位が高い位置にあるので半湿田とした。

経営耕地面積

区分 市町村名	市町村 面積(A)	経営耕地 面積(B)	経営耕地			耕地率 (B/A)
			田	畑	樹園地	
近江八幡市	7,653 <sup>ha</sup>	3,403 <sup>ha</sup>	3,264 <sup>ha</sup>	132 <sup>ha</sup>	7 <sup>ha</sup>	44.5%
安土町	2,454	1,210	1,178	31	1	49.3
五箇荘町	1,636	526	502	19	5	32.2
能能川町	3,125	1,616	1,574	42	0	51.7
彦根市	9,934	3,378	3,234	139	5	34.0
秦荘町	2,503	964	927	29	8	38.5

区分 市町村名	市町村 面積 (A)	経営耕地 面積 (B)	経営耕地			耕地率 (B)/(A)
			田	畑	樹園地	
愛知川町	1299	615	596	18	1	47.3
豊郷町	797	442	433	9	0	55.5
甲良町	1,473	684	649	34	1	46.4
安曇川町	4,832	1,496	1,359	127	10	31.0
高島町	6,322	874	864	10	0	13.8
新旭町	3,236	916	888	27	1	28.3
計	45,264	16,124	15,468	617	39	35.6
滋賀県	334,223	57,260	53,469	2,819	972	17.1

資料：建設省国土地理院「昭和55年全国都道府県市区町村別面積調」  
滋賀県企画部「1980年世界農林業センサス結果報告書」

## 2 都市、村落

湖東地域では、農村集落が全域に渡って分布しているほか、この地方の中心都市である彦根市をはじめ、国鉄東海道本線および旧中仙道沿いに商店街や集落が散在している。また、東海道本線沿線の図幅内市町では、京阪神地域への通勤圏内にあるため、近年各駅周辺に新興住宅団地が急速に形成されつつある。

工場については、大規模なものとして古くから数社の紡績工場が操業しており、近年、合成樹脂、アルミ、清涼飲料水等の工場も立地し、地場産業としては、麻織物、縫製品、パルプ等がある。

保養施設としては、我が国最初の国民休暇村である近江八幡国民休暇村や新海浜水泳場等がある。

湖西地域では、農村集落が大部分を占めるが、高島町、安曇川町内の国道161号線沿いに一部市街地がみられるほか、国鉄湖西線の開通以後、安曇川駅周辺にも新しい市街地が形成されつつある。

工場については、特に大規模なものはみられないが、安曇川の扇骨やクレーブが地場産業の製品として生産されている。

保養施設としては、主なものに白砂青松の萩の浜水泳場や安曇川レクリエーションセンター等がある。



### 3 林 地

本図幅内の林地は少なく、その林性はアカマツを中心とした天然生林が大部分であり、一部でヒノキ、スギの造林が行われている。

#### 林野面積

(単位: ha)

区分 市町村名	総数	国有林 面積 (官行 造林)	民有林 総面積	樹 種 別			竹 林	無 立 木 地		
				計	針葉樹	広葉樹		未 立 木 地	更 新 困 難 地	伐 採 跡 地
近江八幡市	1499	686 (-)	813	688	540	148	114	7	3	1
安 土 町	480	- (-)	480	453	416	37	20	6	1	-
五 個 荘 町	510	- (-)	510	473	376	97	9	24	1	3
能 登 川 町	261	79 (-)	182	146	130	16	23	9	1	3
彦 根 市	2629	- (-)	2629	2398	1,659	739	128	47	7	49
桑 荘 町	940	- (-)	940	894	780	114	29	5	2	10
愛 知 川 町	27	- (-)	27	21	5	16	5	1	-	-
豊 郷 町	10	- (-)	10	2	1	1	8	-	-	-
甲 良 町	192	21 (-)	171	157	147	10	8	3	3	-
安 曇 川 町	1416	- (-)	1416	1,297	841	456	84	31	3	1
高 島 町	4,592	261 (53)	4,278	4,103	2,362	1,741	36	65	62	12
新 旭 町	529	- (-)	529	484	183	301	37	6	-	2
計	13,085	1,047 (53)	11,985	11,116	7,440	3,676	501	204	83	81
滋 賀 県	206,348	17,115 (997)	188,236	179,953	102,041	77,912	1,783	4,184	1,519	797

資料：滋賀県農林部「昭和54年度林業統計要覧」

### 4 湖 沼

本図幅内の湖面は琵琶湖北湖の中央部であり、湖最大の沖ノ島と多景島が位置している。琵琶湖の沿岸には沖ノ島漁港をはじめ数ヶ所の漁港があり、琵琶湖を漁場とする淡水漁業が行われており、あゆ、もろこ等の漁獲がある。

また、本図幅内には数少なくなった内湖や沼のうち、代表的なものとして松ノ木内湖、曾根沼、野田沼等が残っている。

(滋賀県企画部土地対策課)

1982年3月 印刷発行

土地分類基本調査

## 彦根西部

編集発行 滋賀県企画部土地対策課  
滋賀県大津市京町4丁目1-1

印刷 株式会社 武揚堂  
東京都中央区日本橋3-8-16